

36. 歯科学生への教育内容評価アンケートにおける 記名/無記名による信頼性について

○諸富 孝彦、藤元 政考、鷺尾 絢子、北村 知昭
九歯大・口腔保存

【目的】

教育効果や履修者の満足度を評価する際、自己記入式アンケートによる調査が広く用いられる。これらの調査の多くでは、無記名式アンケートが採用されている。これは、記名式アンケートでは回答者が特定可能なため否定的意見を表明しづらいと推測され、調査結果の偏りが懸念されるからである。一方、記名式アンケートでは試験の評点や出席率等と回答を紐付けすることでより詳細な分析が可能となり、また真剣味に欠ける回答の減少が期待されるという利点がある。これまでに我々は、本学歯学部歯学科3年生の履修科目「歯の治療学」で実施している体験先導型教育（①予習課題に対する自己学習レポート提出→②シナリオベース臨床基礎体験実習→③実習内容に即した講義→④技術習熟のため定着実習）に関する履修者への記名式アンケート結果を報告してきた¹⁾。今回、これまでのアンケート結果の信頼性を検証するため、アンケートへの記名/無記名が回答に与える影響について分析した。

【対象と方法】

本研究は九州歯科大学研究倫理審査委員会の承認のもと実施された（承認番号：18-77）。本研究の趣旨を説明し同意した学生（計387名）を無作為に2群に分け、別室で同時に一方は記名式、他方には無記名式アンケートに回答してもらった。アンケート内容は記名欄の有無以外は同一で、回答法も統一した。質問項目は、実習前に課す予習について、講義前に体験実習を行うことについて、自宅学習時間と予習にかける時間、実習にシナリオを導入することについて、そして本教育法を他教科へ導入することを希望するかである。

【結果】

教育内容に対する肯定的または否定的な質問事項のすべてにおいて、記名式および無記名式アンケート回答群間における回答内容に有意差を認

めなかった。また、自宅学習時間や予習にかける時間、予習に用いた参考文献や資料について等、自己に対する回答も両群間の回答内容に有意差を認めなかった。一方で、下表に示すとおり必須回答項目への未記入・未回答や、設問の指示に従わない不適切な回答数は、無記名群が有為に多い結果となった（ χ^2 二乗検定： $p=0.023<0.05$ ）。

表：不適切な回答数

	H28	H29	H30	R1	計
記名群	2	2	1	1	6
無記名群	8	6	0	3	17

【考察】

本研究の結果から、学生による教育評価アンケートへの回答内容は記名の有無により差は生じず、調査結果の信頼性に優劣は存在しないことが確認された。一方で、記名式アンケートでは未回答や不適切な回答が減少するため、より正確な評価が可能となることが示唆された。さらに記名式アンケートでは回答者の試験の評点や講義の出席率、実習態度等と回答内容を紐付けることができることから、各項目との相関関係など詳細かつ多様な分析が可能であるため、有用な調査方法であると推測される。

【結論】

歯科医学教育内容に関する調査において、記名式アンケートと無記名式アンケートでは回答内容に差は生じない。

【文献】

- 1) 諸富孝彦、鷺尾絢子、吉居慎二、宮下桂子、藤元政考、北村知昭：臨床基礎教育におけるシナリオベース体験実習による体験先導型学習の効果。日歯教誌。35(2)：49-57, 2019.